

「石塔寺」について調べるには

阿育王山という山号で、開基は聖徳太子によると伝えられている天台宗の寺院です。境内には無数の石仏や五輪塔の中にひととき目立つ三重石塔がそびえ立ち、広場一帯を、何万という数の五輪塔や石仏の群が埋めつくしています。奈良時代前期の作とされる三重石塔は日本最古・最大のもので国の重要文化財に指定されています。



また、三重の石塔は古代朝鮮の建築法によるものとされており、その風景は大陸的な異国情緒が漂います。（『まるごと東近江市百科』より）

石塔寺の石塔について調べる

- ◆『蒲生町史 第1巻』 P370～P388「石塔寺の石塔」ほか
蒲生町史編纂委員会／編、1995年

石塔寺の石塔の造立年代の各説や規模、これまでの調査、中世の石塔寺の信仰についてなどの説明があります。また、3巻（「美術・建築編」）にも石造美術として紹介されており、石塔寺三重石塔実測図が付図となっています。

- ◆『石塔寺・宝塔』
池内 順一郎／著、蒲生町、1992年

著者の池内順一郎氏は蒲生地区出身の郷土史家で、特に石造遺物について研究しました。この本でも石塔寺三重塔と県内や全国の層塔の分布、韓国の石塔、それまでの石塔寺三重塔の研究などを記しています。

- ◆『石塔寺三重石塔のルーツを探る』
蒲生町国際親善協会／編、サンライズ出版、2000年

1999年に開催された日韓文化交流シンポジウムの記録です。

- ◆『滋賀のなかの朝鮮』
朴 鐘鳴／編著、明石書店、2003年

滋賀県内にある朝鮮ゆかりの遺跡や寺社を紹介しています。石塔寺と百済系渡来人の項では、蒲生地域と朝鮮半島からの渡来人との関係、その象徴として石塔寺のルーツについて記しています。

◆『蒲生むかし話』

蒲生町教育委員会／編、蒲生町教育委員会、１９８０年

「石塔寺の宝塔」として、平安時代に土の中から宝塔がみつけられた伝説を収録しています。

文学者が訪れた石塔寺

◆『かくれ里』

白洲 正子／著、新潮社、１９７１年

随筆家・白洲正子は近江の地をいくども訪れ、『西国巡礼』『かくれ里』『近江山河抄』で紹介しています。『かくれ里』『石をたずねて』では、石塔寺を訪れ「あの端正な白鳳の塔を見て、私ははじめて石の美しさを知った。」と記し、近江の石の文化について論じています。

◆『歴史を紀行する』

司馬 遼太郎／著、文藝春秋、１９７６年

作家・司馬遼太郎は「最後の石段をのぼりきったとき、眼前にひろがった風景のあやしさについては、生涯わすれることができないだろう。」と石塔寺を訪れた時の感動を記し、近江商人のルーツと帰化人について論じています。（「近江商人を創った血の秘密」）また、『街道をゆく２（韓のくに紀行）』でも朝鮮と蒲生について記しています。

石塔寺の祭りについて調べる

◆『湖国と文化 ８７号』

滋賀県文化振興事業団／編集・発行、１９９９年

石塔寺で８月２２日に近い日曜に行われる石塔寺万灯祭を写真とともに紹介しています。「石仏・五輪塔の一つ一つにロウソクの火が献灯されるのは、薄暮になってから。夜空をこがす炎と煙が幽玄の世界をつくる。」

◆『近江のかくれ里 白洲正子の世界を旅する』

いかい ゆり子／著、サンライズ出版、２０１１年

白洲正子『かくれ里』の紹介記事を『湖国と文化』に連載したもので、石塔寺とともに万灯祭を中心とした「石塔フェスティバル」を紹介しています。１９８９年のふるさと創生一億円事業を機に韓国との国際交流を深めていることを記しています。